

豫科練



No.485 令和6年

11・12月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.28…	2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》……………	3
○豫科練之碑建立から五十八年……………	4
○真珠湾攻撃50周年 たった一人の慰霊祭⑥……………	7
○彗星未だ還らず 或る予科練出身搭乗員の軌跡⑤……………	10
○触接機の電信員……………	16
○多田野語録……………	19
○雄翔館見学者所感……………	20
○海原会寄付者芳名簿……………	22
○事務局日誌……………	22
○赤とんぼ掲示板……………	23

公益
財団法人

海原会

海軍に
予科練習生を假してゐる

海軍に

予科練習生

予科練習生を假してゐる

予科練習生

高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行
予科練習生を偲びてよめる

海はらに

はたおほそらに

散華せし

きみら声なく

いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑 芙蓉之塔 No.28



「芙蓉之塔」は太平洋戦争末期に沖縄特攻作戦のため、鹿児島県曾於郡八合原台地の岩川航空基地に進出した芙蓉部隊で散華した隊員を慰霊するため建立された塔である。芙蓉部隊は、戦雲急を告げる沖縄戦の真最中の昭和二十年四月、静岡県藤枝基地で搭乗員の練成を終え、鹿屋基地に進出した夜間戦闘機隊の精鋭部隊で、八合原台地（大隅町）の岩川基地に於いて作戦を展開した。彼らは、沖縄攻防戦に勇戦奮闘し、終戦の日まで激闘を続けた。この間に延べ七八六機が出撃し、再び帰らざる搭乗員八十八名未帰還機四十余機の多きに達した。

戦後、芙蓉部隊で闘った隊員が、四半世紀を経て跡地で慰霊祭を行なったが、三十三回忌に幻の夜戦隊といわれた芙蓉部隊の戦跡を永く後世に伝え、英霊を鎮魂するためにこの碑を建立した。

●所在地 鹿児島県曾於郡大隅町

●建立年月日 昭和五三年十一月十一日

●揮毫 山中貞則氏

（地元出身衆議院議員）

●問合せ 芙蓉之塔保存会

会長 井上徹志氏

（現地担当） 平松光雄氏

同県曾於郡大隅町月野7298

（09948・2・2434）

海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 辞世

遺詠

◎故 長谷部寅祐 二飛曹 (十九歳) 乙飛十八期 埼玉県出身

皇国の 試練に散らむ 若桜

いくとせの春の 長き祈りて

菊水三号第四神剣隊 零戦 昭和二十年四月十六日鹿屋発進
喜界島南東沖にて特攻戦死

◎故 高橋 賢光 二飛曹 (二十歳) 甲飛十二期 愛知県出身

いざたたん 八幡の前 誓いたて

すめら御国を 護る神風

神風特攻隊皇華隊 97艦攻 昭和二十年四月二十八日 串良発進
嘉手納沖艦船に特攻戦死

豫科練之碑

建立から

五十八年

公益財団法人海原会

理事 平野 陽一郎

予科練之碑（予科練二人像）が予科練の聖地である土浦海軍航空隊の跡地に建立されて今年で五十八年目を迎えた。

本記事では乙飛十八期堺周一氏が残された「予科練戦後の歩み」そして筆者が同氏から聞き取りした内容にもとづき、予科練二人像が現在の場所建立された経緯や、除幕式の様子等について紹介するとともに、予科練雄飛会機関誌「雄飛」に掲載された関連記事を紹介する。

【予科練之碑建立の経緯】

昭和三十三年三月、乙飛十八期生を中心とする東京近郊

の同窓生約百名が、東京目黒の「みやこ温泉」に集結、乙飛一期野口克巳氏から「予科練雄飛会」の再結成が提案された。

（予科練雄飛会はもともと、予科練一期生が飛行練習生過程を卒後して実施部隊に配属された、昭和八年に初代予科練部長の市丸利之助中将の発案で、予科練卒業生の結束を図る目的で結成されたが、終戦時に解散した。）

そして、四年後の昭和三十七年の幹事会において同氏が幹事長に、霞ヶ浦海軍航空隊副長兼教頭であった桑原虎雄元海軍中将（当時 新明和工業株式会社顧問 旧川西航空機）が初代会長に就任し「予科練雄飛会」が正式に設立された。

翌年の昭和三十八年十二月八日、雄飛会主催の第一回慰霊祭が靖國神社において開催された。

そして同日、予科練雄飛会を含め、予科練甲飛会、予科

練丙飛会、予科練特乙会の四会が協力して「予科練戦没者慰霊碑」の建立が決議され、「予科練戦没者慰霊碑建立委員会」が設立された。

碑の建立予定地には次の四か所が候補地に上がったが、乙飛十八期生の関わりが強く、かつ自衛隊の協力と地元阿見町の誘致要望が大きかった土浦海軍航空隊跡地（現陸上自衛隊土浦駐屯地構内）に決定された。

- ① 横須賀海軍航空隊跡地
- ② 靖國神社境内
- ③ 富士の裾野
- ④ 土浦海軍航空隊跡地
（武器学校）

昭和四十一年五月二十七日、高松宮殿下及び喜久子妃殿下をお迎えし全国から約三千人もの関係者が参列して予科練之碑の除幕式が挙行され併せて予科練戦没者慰霊祭が開催された。

（以下昭和四十一年十一月十一日発行の「予科練（第十八号）」に記載された記事）

【乙飛一期

野口克巳氏の言葉】

「除幕式に想う」

幾百万の血を流した支那事変から大東亜戦争、二十三歳の初陣から三十一歳の終戦まで十年に近い戦いの明け暮れであった。現地の戦力構成に加わっていない勤務の日にも血なまぐさい死闘の話を聞かない日は一日としてなかった。同期同窓先輩部下であった人々、親しかった人々が次々と過去の人となり戦火の空に散って行く毎に、その運命は遅かれ早かれ自分の運命として見つめて来た。そして幾百回も敵弾の中に突っ込んで行つたが幸か不幸か護国の神となり得なかった。そして、終戦、昨今の追い詰められた戦局に数日の間のみ生き得るものとして「我」の全て

を捨て切っていた私の、詔勅を聞いた胸中は複雑であった。「遂に死ねなかった」いや「生きている」「もう死ななくともよい」思うまいとしても「俺は生きていた」という現実は何れの想念に勝って強く心を占領していた。多数の英霊には申し訳ないが、今日迄は考えることさえ女々しい事であった「生きて国に帰る」という現実の感情は「肉体のよろこび」として手先から足先まで脈を打っていた。

何という私の、人間としての弱さであろう、脆さであろう未練さであろう。多くの亡き友の前に私は戦後二十年間過ぎし日の戦いに散った友を想って「もの汚れ」として恥じてきた。戦後十余年を経て、雄飛会の設立や結束、そしてその運営に地道をあげてきたのは終戦の日の「心の汚れ」を、今は亡き友へ「許せ」と叫ぶ心の反動からでもあった。心をえぐられる私は、生きている同窓を結集し

て慰霊の行事を行う外になう方法がなかったのである。昭和三十七年十二月十五日、東京芝の、増上寺における幹事会が機会だと判断した私は、慰霊碑建立の発議を行い、各期幹事四十余名に賛同を求めた。満場一致で建立同意の決議を得て碑建立の一步を印したのであるが、ついに初期の目的を完遂した。

次々と発生する凡百の困難事を、会長並に建立委員長以下全委員の、己を空うしての奮闘の結果衆目の前について完成して、死する者も、生きる者も、碑に帰一し得る安心立命の境地をつくり、自他ともに許す日本の予科練魂を再現し得たのである。

私達は生きている限り碑の維持、顕彰に建立以上の精魂を打ち込んでゆきたい。除幕式当日、碑の前で二十一年前の「心の汚れ」を、亡き友に私は手を合わせて詫びた。人間のおろかさ、未練さを代表している様な自分の心の在り

方を、過ぎし日から堪えられない思いで幾百度かみしめた事であろう。立派に完成した碑、亡き友に捧げる幾千幾万の協賛者の誠心、力を捧げ尽くした建立担当者、その方々の赤心に私は心から「ありがとう」と御礼を申し上げたい。そして碑に詣でる毎に私は終戦の日の「心のうずき」を詫びる事であろう。亡き友よ「許せ」と。

（雄飛会機関誌「雄飛」第十八号に掲載された記事）

【前書き（委員会）】

亡き友の勲を永遠に讃えて、その「予科練之碑」は完成された。責を果たしたという喜びと感激、だが、我々以上に、遺族各位の感激は強い。それは、戦後二十年の間、亡き同窓の御遺族は、亡き児を、父を、夫を失った悲しみの中にも、国家の礎となったのだと、誰一人として

顧みるものもない中で心に叫び苦しみに耐えてこられたのである。そして、このご遺族たちは、どれだけ今日の日を待っておられたであろうか。除幕式に参列された人、都合つかずに参列できなかった御遺族達から委員会・本部に送られてきたその便りをここに、掲載、同窓各位にお伝えしよう。

【御遺族のことば】

「お父さん立派に

除幕しました」

予科練一期生

故海軍中佐 遠藤幸男

長女 遠藤幸子

真青に晴れ渡った大空に、突然慰霊飛行の編隊がけたたましい爆音をとどろかせて飛び去った。私は「お父さん！」と心の中で小さく叫んだ。除幕の綱を持つ手にかすかな震えを覚える。妃殿下が予科練の像の除幕をなさった

のを見定めて、私は綱を握った手に力を入れた。その瞬間、歌碑を覆っていた幕が落ちた。目の前に高松宮妃殿下のお心のこもった歌碑が現れた。「お父さん、立派に除幕しました。幸子がやったのですよ」突然、予期しなかった涙が頬を伝わって落ちた。

たえようとしても堪えきれない涙だった。今、妃殿下の除幕によって生まれたばかりの兵士の像の前に膝まづいて、大声をあげて泣きたい衝動でいっぱいです。

私が生まれたのは、昭和二十年八月十日、その時には、もうすでに父は永遠の眠りについていた。私の顔も見ずに幸子という女の子とも知らずにこの世を去っていた。私は「お父さん」という言葉の味を知らない。甘いのか、辛いのか、酸っぱいのか、その味が知りたくて、父のことが載っている雑誌を読みあさり、人の話に夢中になって耳を傾けた。しかし、直接には何も

感じ取ることはできなかった。心のむなしさを幾度経験したことだろう。雑誌などには「B29撃墜王遠藤幸男大尉」として活躍した功績ばかりを述べているだけで、父の味は何も書かれていなかった。

私は自衛隊音楽隊の演ずる「海の幸」に聞き入っていた時、ふと遺族席の最前列にいる一未亡人に目がとまった。亡夫の写真を胸に抱いて泣いていられる。きつと今まで苦勞しながら頑張り通してきた氣力が一度にぬけてしまったのだろう。私もだんだんその方の姿がぼんやりしてきて、兵士の像が父の顔に見えてきた。口を堅く閉ざして、笑っているのか怒っているのか分からないその顔が……。母も泣いていた。会場の皆も泣いていた。戦争はもう絶対にあつてはならないのだ。こんなに多くの人を苦しめ、泣かせるのだから。しかし、私たちはいつ

までも悲しんでばかりはいられない。その時は既に過ぎたのである。これからは、戦争という悲惨なことが二度と起こらないように努力し合い、世の中のために尽くし合つて、今まで苦勞を背負い続けて来た父母に代わって私達二世が立ち上がるべき時が来たことを痛感する。

「御英業に只々

感泣の極みです」

乙飛五期生

海軍少尉 故

母 中垣政介ノ

私は五期生中垣政介の母でございます。襲日来、予科練戦没者慰霊碑建立につきまして、ご尽力の結果、ゆかりの地霞ヶ浦湖畔に恰も四海を睥睨するか如き偉容にて完成し、去る五月二十七日除幕式が執り行われましたことは、誠にありがたく感激之に勝るものはありません。

戦後二十年常々思い続けていましたことは、如何にお国の為とは言え子供を失った悲しみは、心の底にある何かを、どこにブツ付け様もなく、終戦直後迄は戦死者よ、遺家族よ、と言葉を掛けられ、或いは靈拝などして下さった人々も、当今に至りましては、誰一人として戦死者の靈と書かれたお墓を見ても一顧だにする者もなく、全く忘れ去られています。

唯年二回のお彼岸に市主催の慰霊祭があるだけで、それも近年はほとんど儀礼的に過ぎません。国家百年の安泰と繁栄を一ぺんの疑いもなく信じて、身を犠牲にし戦場に散った戦死者の靈こそ、後々の人々に「ああそうであつたのか」と肌感じさせる何かを欲し続けておりました折、此の度の御英業只々感泣の極みでございます。

一度は是非碑前に参拝し之の建立にお骨折り下さった方々やご管理下さる雄飛会本

部の方々に親しく御声咳に接してお礼申し上げたく念願致しています。



終わり



真珠湾攻撃50周年

たった一人の慰霊祭⑥

第四代理事長

菅野 寛也

平成六年十二月八日・

一日五回のセレモニー①

ホワイト博士が、今年（平成六年）の海原会の慰霊祭に参加された後、静岡、広島と戦災の地を訪れたいとの希望で、十月十七日来静された。勿論、賤機山山頂の日米空襲犠牲者の碑に参詣された。「B-29墜落搭乗員の碑」に、遺品の水筒による献酒をされて、喜んで帰られた。

そして、再開を約し、今年も十二月七日の「アリゾナ参詣」となった。今回も海原会（予科練）前田会長の親書を携行しての出発である。来年の終戦五十周年の碑の設置場所が、二転三転して、パンチ

ボウル（国立墓地）となったため、ダイレクターのカスタニエッティ氏にお逢いすることとなった。

十二月六日、JAL74便、二十一時三十分成田発、ハワイ時間六日九時ホノルル着。フィスクさんが、今回も出迎えに来て下さり、その上、翌日十二月七日も、早朝六時に迎えに来て下さった。

ホノルルのハイウェイも大変な交通ラッシュで、年々ひどくなっているようであり、時間がかかる。カーラジオが、「日本のミゼット・サブマリン」について報じている。空襲時の写真のコンピューター解析の結果「特殊潜航艇の魚雷が二本、米戦艦に命中した」という結果が出たらしい。驚いたニュースだが議論している暇も無くアリゾナ・ビクターズ・センターへ着いた。

今年はフィスクさんは七時からのメモリアルのセレモニーへ参列、私はビクターズ・

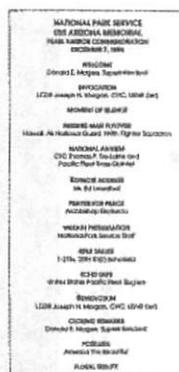
センターのモーニング・セレモニーへ参列することになった。

早朝より小雨模様でビクターズ・センターより「ARRIZONA」を望むと、対岸に大きな虹がかかっている。ビデオ撮影していると、米海軍の制服のカメラマンが近付いて来て「もっと岸辺の方が、よく見える」と声をかけてくれた。「サンキュー」と場所を変えて撮影していると、そのカメラマンが私を被写体にして写真撮影にかかった。そこで今度は「ネクタイを写させて欲しい」と言い出した。気がついたら、この日は我がF86ブルーインパルスと飛行機雲のネクタイに、日米両国旗をクロスさせたタイピンをつけていたのである。

まだ周囲に人も少なく、時間もあるようなので「B-29搭乗員遺品の水筒」をとり出し、静岡空襲のストーリーやら、日米合同慰霊祭について説明したら、メモを取

モーニング・セレモニーはマギー館長以下アメリカ人が殆どを占めているが、日本の仏教会の方々も参列している。

アリゾナ・ビジターズ・センターのセレモニー



り、「サンキュー サー!!」と敬礼して去って行った。米海軍の新聞にでも載るのかな?と期待したが、果たしてどうか確認していない。



“ミッシングマンフォーメーション” 一機欠けた編隊飛行

セレモニー開始直後、四機編隊のジェット機が飛来した。突如、その中の一機が轟音とともに急上昇して視界を去り、残った三機が、一機欠けたままの編隊で飛行を続けた。これぞ「ミッシングマンフォーメーション」で、思わず「仰いだ夕焼け、南の空に、未だ還らぬ一番機」と、「同期の桜」の一節を彷彿させるような情景であった。

厳肅な儀式の後、隣にいた日本の仏教会の人が「やはり、アメリカは神の国ですね」とポツンと呟いた。

真珠湾攻撃についての歴史的な見解も、次々と明らかにされている。

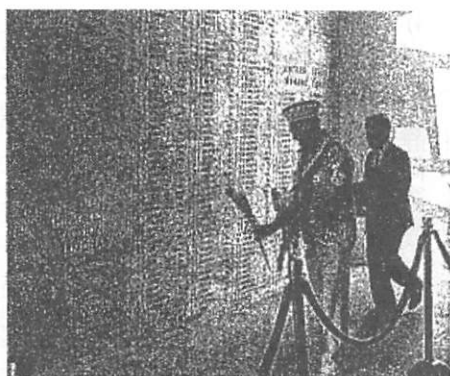
先制攻撃と言う最高の戦術も、①日本大使館員の不手際による最後通告が、遅れたこと。②米国情報部は、日本大使館員よりも早く、最後通告を解読していたが、首脳部が、日本を侮り、特に真珠湾攻撃の可能性は無い、との判断で、現地司令官に通告しなかったため、奇襲攻撃を受けた。と言うのが真相である。それが結果的には、日本が非難されるようになったと思う。

然し、ここではそのような議論よりも、厳肅な儀式に参列することが大事である。

私の心の中に、先程の仏教会の人の言葉がこの日、ずっと影響を与えたようだった。

フィスクさんと「ARIZONA」のマーブルルームにて。

1,177名の戦死者の名前が刻み込まれている。



式後、「ARIZONA」より帰ってこられたフィスクさんを中心にデ・ヴィルジーリオさん等とメモリアルに参詣、勿論、B-29の水筒を持参してのセレモニーである。フィスクさんと一緒に参詣、ラッパ吹奏、そして献水と行事を続けると、写真、サインを望まれるのも何時もの通りであるが、これで今年も「何人かの理解者が増えたかな？」と嬉しくなる。ささやかながら、日米親善を果たしていると自負している。ビクターズ・センターでも、フィスクさんは「サイン攻め」である。これは、サバイバーとして大事なボランティア活動である。傍らに私が立っていると、フィスクさんの説明により、私の方にも署名を望まれる。「ドクタースガノ」と紹介されるので、その中の一人が「私もメデイカルドクター」だと名乗った方がいる。この方とはこれから文通する機会を持ちたいと思う

が、「正確な英文」を書かなければならないと荷が重い感じがする。

昼食もそこそこに、日蓮宗ハワイ別院を訪れた。ハワイ方面日本海軍戦死者の霊、静岡空襲静岡市民犠牲者の霊及びB-29墜落搭乗員のため、小川如洋師が懇ろに読経して下さった。

「来年の九月のセレモニーの際、日本海軍の方が、三〇〇名参列予定ですが、ここで御供養をお願い致します。」と前田会長のメッセージをお伝えした。

これで本日三回目の儀式が行われた訳だが、フィスクさんはまだ、スケジュールが詰まっていると、急いで別院を出発、次なる目的地はトリプラーの陸軍病院である。

この病院は、ホノルル空港よりハイウェイで「ワイキキ」へ向かう途中、左手の小さい丘の上にあり、ピンクの綺麗な建物であるが、訪れるのは初めてである。先程のメ

デイカルドクターと言い陸軍病院と言い、今日は軍医であった祖父のお陰かなと思いつつ到着した。突然の来訪者である私に対しても、流石にドクターと言う事で丁寧に対応して下さり、更にフィスクさんが話されると、「B-29搭乗員の遺品の水筒の事は聞いている。これが、その水筒ですか？」と多数のスタッフが集まって来た。これは、もう立派なパスポートである。そして部外者としては最良の最前列中央の席へ案内された。

この病院は、空襲当時、負傷者が入院したり、大変だったそうだが、正面の広場で夕陽を背にしてセレモニーが始まった。

ゲストの最高年齢者は九十歳の第一次世界大戦従軍の勇士だそうで、ユーモアを交えながら豊饒（かくしゃく）とした挨拶をされた。

整然とした慰霊祭であったが、この最中に何か私の心に問いかけてくるものがある。

確かに、ここも古戦場である。重傷者、戦死者が収容された病院である。然し何か、日本の慰霊祭とは違う雰囲気がある。何だろう？勿論、華麗と言う形容では無い。だがここには悲愴感のみではなく、戦死者を勇者と称え、悲しみを乗り越えようとする雰囲気がある。ゲスト・スピーチの中で、再三、そのような言葉があった。そして国歌は「星条旗よ、永遠に！」である。



Tripler Medical Center
Central Pacific Campaign
Battle Site Commemoration
7 December 1994

TRIKLER ②

- Sequence of Events
- Arrival and Introduction of Official Party
 - Widening of Gates and Passing of the Honor Guard
 - National Anthem and Hawaii State Song
 - Reading of the "Chaplain's Notes"
 - Commending General's Remarks
 - Guest Speaker: Colonel (Ret) Frank J. Lee
 - Presentation of the Colors
 - 21 Gun Salute
 - "Taps" Performed by Wind Band
 - Battle Site Commemoration
 - Blessing Offered by Chaplain Carpenter
 - Hymns
 - Service Strategy
 - Departure of Official Party
 - Replenishment Served



トリプラー陸軍病院のセレモニー

日本での慰霊祭と異なるのは、結局、国民のサポートの違い、戦後の国民意識の違いであろう。日本の今日の繁栄も、戦争犠牲者のお陰であると言つても過言では無いと思うのだが「愛国心」と言うと

すぐ「軍国主義」と短絡させてしまい「権利、権益」のみを主張して「義務、責任」を蔑（ないがしろ）にするような教育が、放任されて来た「ツケ」が、今日の日本の国民性になってしまったと嘆かわしい。

教職という立場よりも、権利、主張のみを旗頭とした「日教組」とそれに躍らされたような「PTA」の責任は重大である。

平成五年（一九九三年）ウエスト・ポイント卒業のアメリカ陸軍士官と結婚した次女「紀子（のりこ）」が十月に男児を出産した。

臨月にもかかわらず、折からの国際紛争で夫に出動命令が下り、一人異国で出産を迎

えるようになった娘のために女房が一ヵ月渡米して世話をすることになった。

「日本人は、平和と空気はタダだと思っている」と何回も外国人に言われたことが実感となった訳である。

日本は平和で有り難いが、世界の中の一員として、一国だけ「良い子、ブリッコ」していると見られているのも事実である。

そんな事迄考えさせられるような雰囲気の中で、フィスクさんの鎮魂ラップで締めくくりとなった。

トリプラーの式が終了したのが、十六時四〇分「ARIZONA」のサンセット・セレモニーが十七時からだから、それからが大忙し、そして一寸遅れたが、フィスクさんの御祈祷はギリギリで間に合った。

続く

彗星未だ還らず

或る予科練出身

搭乗員の軌跡⑤

佐藤 剛

特修科飛行術練習生となる

厳島神社での町谷兵曹との出会いの後、伯父は特修科偵察術練習生として横須賀航空隊へ派遣されることになった。厳島神社から瑞鶴へ戻った折に転勤を知らされたものと思われる。

もし転勤がなくそのままトラク島へ出航しブルーゲンビル島沖航空戦に参加していれば、まず戦死は免れなかったものと思う。この戦いで瑞鶴艦爆隊はほぼ壊滅している。

この特修科飛行術練習生とは、成績優秀な下士官の中から超一流の人材を選抜して、更に心技一体の錬磨を重ね、爆撃、通信、観測など、それぞれの専門において抜群の特

技を身につけさせる、いわゆるその道の名人を育てることを目標としたもので、この精華は緒戦時のハワイやマレー沖海戦に遺憾なく発揮された。（以上、倉町秋次著、「予科練外史」より抜粋）

特修科出身の偵察員としては金井 昇一飛曹（真珠湾攻撃当時）が非常に有名である。金井兵曹は大正八年長野県出身、昭和九年六月横須賀海兵団に入団、通信兵を経て、昭和十一年十月第三十五期偵察術練習生に採用され翌年七月同課程を首席で卒業した。その後空母「蒼龍」に乗り込み、中支、南支方面航空作戦に参加した。昭和十三年十一月第一期特修科練習生（爆撃専修）となり翌年十二月に卒業した。空母「赤城」を経て昭和十四年十月に「蒼龍」に転じ、飛行検定優秀により山本五十六大将から表彰された。空母「赤城」を経てハワイ作戦に備えた昭和十六年十月の連合艦隊爆撃競技

大会では、命中率100%という抜群の成績で優勝し、南雲忠一中将より短刀を授与されている。

真珠湾作戦では蒼龍水平爆撃隊の嚮導機（きょうどうき：編隊の爆撃の照準を一手に任される）として出撃し、敵主力艦に命中弾を与え帰還した。しかし十二月二十二日ウエーキ島攻撃の折、敵戦闘機の奇襲により戦死した。戦死後、全軍布告二階級特進の榮譽を受け、海軍特務少尉に任じられた。日本海軍航空隊の至宝、爆撃の神様として海軍航空隊に名を刻んだ。

金井少尉（戦死後）については令和三年十二月五日にNHKBS1スペシャルにて放映された「真珠湾80年生きて愛して、そして」にも取り上げられている。

金井兵曹は戦記関連書籍に登場することはないが、真珠湾作戦当時、「蒼龍」の金井兵曹と共に水平爆撃の名手として海軍航空隊に知れ渡っ

た優秀な偵察員に、「飛龍」乗組みで、新発田にゆかりのある小林正松一飛曹（当時）がいた。

小林兵曹は昭和九年、新潟県新発田商業学校を中退して横須賀海兵団に入り、第三十期偵察練習生となり昭和十一年三月卒業。優秀な成績を収め、恩賜の銀時計を授与されている。「単なる秀才ではなく太っ腹で、隊員の信望篤く、率先垂範、本心に信頼できる人物」とは小林兵曹を知る上官の人物評である。その後抜擢され、金井兵曹と同様、第一期特修科飛行術練習生となった。

小林兵曹は真珠湾攻撃の際に飛龍水平爆撃隊の嚮導機を務め、ミッドウェー海戦で赤城、加賀、蒼龍の三空母飛弾後、孤軍奮闘した飛龍の雷撃隊として発艦、隊長の友永丈一大尉の二番機として米空母ヨークタウンを雷撃し、同空母を航行不能にしたが友永機とともに撃墜された。

その時の小林機のペアは操縦、石井善吉一飛曹（操縦三十一期出身）、通信は伯父と予科練同期（乙種九期）の島田直二飛曹であった。

伯父は昭和十八年八月十一日に第三十期特修科飛行術（偵察専修）練習生（偵察特練二期生）を命ぜられ、横須賀航空隊に着任した。入校者は二十一名であった。偵察特練二期生には伯父の他、予科練同期生が三名乃至四名、水平爆撃教程に一名入校したと思われる。伯父の同期生は全員が戦死し、特練二期生は終戦時の生存者は三名であった。

入校後、偵察特練二期生は入校後約半年に亘り横須賀航空隊、木更津航空隊で実戦さながらの訓練を受けることになる。

訓練内容については、偵察特練同期の生存者である、田中三也氏（終戦時飛行兵曹長）自著「彩雲のかなたへ」で詳しく著述しているが、要

約すれば次のようであった。

「艦艇識別」

影絵や模型を使い、ビルの屋上や双眼鏡を使って識別する訓練を行った。

「天測航法」

天測理論の座学から始まり、天測表と六分儀により太陽、月、惑星、恒星と水平線の高度と角度を測り、機位を求める。気流の関係で飛行中の測定は至難の業であった。

「洋上遠距離航法」

海軍では常に洋上の航法であって、飛行高度における正確な風向風速を測定することが基本である。飛行時間と燃料の関係で普段の訓練は百哩（約百八十五km）程度の進出で測風・天測・写真・電信を主に実施していた。

「高高度局地偵察」

高度八千メートル以上で、目標は横須賀軍港とし、小型の二人乗りの陸上偵察機を使用して行った。軍港に近づくにつれ目標も確認できるよう

になり、肉眼と双眼鏡を使つて識別し、見取り図上に艦位をくまなく記入し、その成果を暗号文で打電した。仮想敵機役の零戦も現れて実戦さながらの訓練を行い、付近の天候を知らせながら帰投した。高高度での耳と気圧の関係や酸素の重要性を知る経験を積んだ。

「写真偵察」

目標を伊豆大島とし、使用カメラと縮尺の指示を受け、カメラ、コース、撮影高度、撮影枚数等を各自計画実行した。出来上がった写真の判読は各自が行い、写真モザイクで大島の写真地図を作成し、実体双眼鏡を使って火口の深さや港の船のマストの高さを測定する作業も行った。

「無線」

総員の技術はすでに確かなものであったが、送信、受信、暗号電文の作成はもちろんのこと、気象電報を受信し

て天気図を作成し、予報を提出した。

以上のような訓練を経て、卒業を控え、偵察術の全てを駆使した総合試験が九七艦攻を使用し、一泊二日をかけ実施された。内容は遠距離航法、局地偵察、電信、写真撮影、艦型識別等であり、飛行コースは房総半島から南西方向に飛び、伊豆諸島の指定された小島を偵察しながら洋上を約百五十哩（約二百八十km）進出するものであった。後日、同様の試験が再度実施され、修行の締め括りは小論文の提出であった。一人の落伍者もなく昭和十九年二月二十九日（閏年）に卒業し、その後全員が第一線部隊へ配属された。

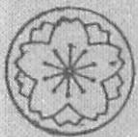
（注）日本海軍は教育に熱心であり、下士官・兵それぞれに職種に普通科、高等科があり、職種によっては、さらに大任を果たし得る能力をつけ

させるため、実戦経験者から選抜する特修科練習生課程があった。（略して〇〇特練という）。航空機搭乗員には、爆撃・通信・偵察の三つの特練があった。ミッドウェー海戦の反省から偵察を重視し、この偵察特練が実現した。

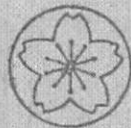
一年の教育機関を六カ月に短縮し、昼夜の激しい反復訓練が行われた。

但し戦況の悪化により余裕がなくなつたためか、偵察特練は二期で終了し、終戦時一期生の生存者は一名（入隊者は三十名？）、二期生の生存者は前述した通り、三名であつた。

（注）伯父は特修科卒業により二回目の特技章を授与された。（二回目は飛練実用教程終了時に授与されている）海軍ではこの特技章がその道のプロフェッショナルであることの証であり、特技章の授与は大変な名誉であるとされた。



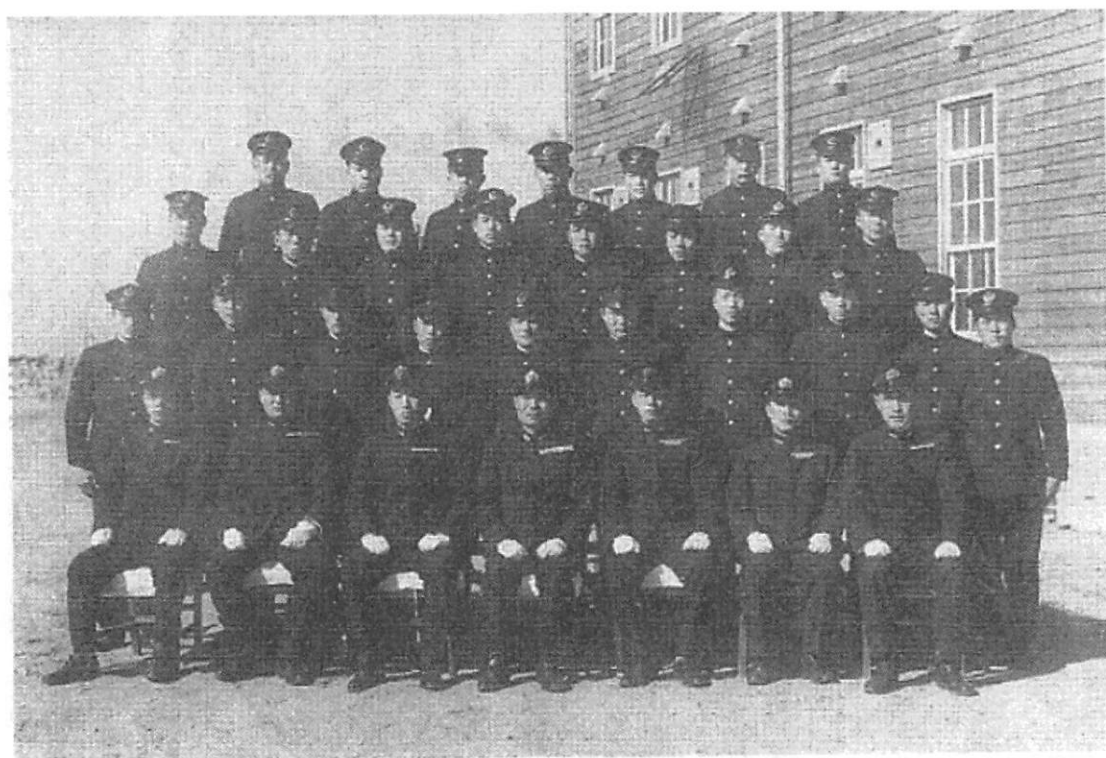
特修科、専修科、高等
科又ハ飛行練習生ノ教
程ヲ卒業シタル者



普通科ノ教
程ヲ卒業シタル者

左：特修科特技章
右：普通科特技章
（「海軍兵須知提要
（昭和19年版）」より）

所定の教育を修業した下士官兵はその証明として軍服の左袖にこれらを縫着した。※編集部注



昭和19年2月29日、6ヵ月の訓練を終え木更津航空隊で修業の日を迎えた第11期特修科飛行術（偵察専修）練習生21名と教官・教員ら。

田中三也氏の著書「彩雲のかなたへ」から転載。

最後列右端が田中上飛曹。その左隣が伯父の坂田上飛曹。

田中三也：大正12年石川県生まれ。昭和14年10月、甲種予科練5期生となる。重巡「利根」水偵搭乗員として第2次ソロモン海戦、南太平洋海戦に参加。特修科卒業後、偵察101飛行隊に所属し「あ号作戦挺身偵察」に成功し連合艦隊司令長官より個人感状を授与される。その後彗星で九州、台湾、比島で作戦に参加、彩雲で本土防空戦、沖縄戦に参加。戦後海上自衛隊に入隊し2等海佐で退官。その後民間に移り、国内、比島、アフリカ等の航測業務についた。海軍、自衛隊、民間での飛行時間総計約5500時間。

第六五二海軍航空隊へ配属され「あ号作戦」（マリアナ沖海戦）に参加

伯父は特修科飛行術練習生を卒業後、三月十日付で第一機動艦隊、第三艦隊、第二航空戦隊、第六五二海軍航空隊への転勤を命ぜられ、空母「隼鷹」へ乗組むことになった。

訓練は岩国基地で行われ、伯父はここで初めて「彗星」艦上爆撃機に搭乗することになる。

岩国での猛訓練を経て、五月十六日ボルネオのタウイタウイ泊地に入港した。しかしタウイタウイは無風状態が続き、飛行甲板が短い隼鷹では着陸速度に必要な合成速度が確保できず、着陸速度が九九艦爆に比べ格段に速い彗星にはその後四十日間飛行訓練が出来なかった。

近くに適当な陸上基地もなく、外洋に出れば敵潜水艦の

攻撃を受ける恐れもあったためだとされている。

このことが搭乗員の技量維持のみならず、機体の整備にも致命的な打撃を与えたとされている。尚、九九艦爆隊は訓練が出来たようである。

そうこうするうちに六月十三日に出航の命が下り、小澤治三郎中将が総指揮を執る空母九隻、総数七十有余隻からなる第一機動艦隊の一員として、伯父はタウイタウイを出港した。

六月十九日に索敵機の敵機動部隊発見の報告により、第二次攻撃隊として「隼鷹」の他、二番艦「飛鷹」、三番艦「龍鳳」搭載の戦爆合計六十四機が次々と発艦していった。

伯父は第二次攻撃隊総指揮官、阿部善治大尉の二番機として彗星に搭乗、操縦の小瀬本國雄上飛曹と共に五百キロ爆弾を抱いて発艦した。

小瀬本氏は、戦後「艦爆一代」という手記を著し、発艦

後の状況について次のように回想している。少し長くなるが、「あ号作戦」時の伯父の様子が窺えるため、以下抜粋を著す。

「私は隊長機の二番機である。試運転の結果はエンジンの調子は上々である。後席の偵察員は同年九期乙の坂田清一兵曹である。私は同年のよしみで彼のことを「金坊」と呼んでいた。

「オーイ、金坊、準備はいいか、しっかりやろうぜ」

「オーイ了解。頑張るぞ」と呑気なことを言ってお互いの気持ちを和らげあった。隊長機が轟音を響かせて発艦していった。次はわが機の番である。初めて五百キロ爆弾を抱いての発艦で緊張した。発艦指揮官の白旗が力強く振られた。

私はスロットルを全開にした。艦側や艦橋には、乗組員一同が大きく帽を振って見送ってくれている。機のスピー

ドはぐんぐんと増していく。これなら絶対大丈夫だ。私は左手を大きく上に振り、これに応えた。前部リフトを過ぎたころ静かに操縦桿を引くと、機はすうっと自然に浮上した。すぐに脚を納めて隊長機に編隊を組もうと脚上げ把柄を操作した。が、どうしたことだろう。左脚は納まり安金灯の青色が点灯したが、右脚はどうしても納まらないのである。「畜生ッ」私は懸命に手動で脚上げ操作を繰り返したが、どうしても納まらなかった。

「ああ不運」何と不運な事だろう。せっかく選ばれて、世紀の決戦に指揮官の二番機として参加しながら、この有り様は。私は全速で隊長機に近づき、機の状態を確認してもらい了解を得たので、いったん母艦へ降りて修理後ただちに単機で攻撃に向おうと、母艦上空を旋回し続けた。

攻撃隊が全部発艦し終わった甲板上空へ到達して、着艦

信号を送った。すると発着甲板上に人文字で「ヤッパ」と書かれているのが目に入った。私は後席へ、「おい、ヤッパへ行け、とあるぞ」と言うとき、彼も、「仕方ないさ、出直しだ」と諦めきれないのを押し殺すように、元気のないうと、小さな声で答えた。

私は全身に張り詰めていた闘魂が、一挙に崩れ、抜け殻のように、空虚な気持ちでわが機の爆音に寂しく語りかけた。「出直した、再出発だ」と。私は非運を嘆きながら、編隊を組んで堂々と進撃する阿部隊長、久我分隊長、また一緒に今日のこの日のために訓練に励んだ同僚の武運を祈った。そして、ヤッパ基地に向けて定針し、一航戦の真上に達した。

眼下には不沈空母「大鵬」「翔鶴」「瑞鶴」の三空母が並んで進撃航行中であつた。ちょうど私が「翔鶴」の右舷一〇〇〇メートルの上空へ来たときである。突然左前方の

海中から、雷跡が見えたのである。六本の雷跡が見えたのである。六本の雷跡が、扇型に広がり「翔鶴」目がけてスルスルツと延びていく。私は大声で、「左『翔鶴』へ雷跡ッ」と怒鳴るように叫んだ。潜水艦の姿は上空からは視認できない。が、雷跡の始点海中にすることは確かである。私はただちに敵潜水艦爆撃を決意して、弾倉蓋を開け、雷跡と海面を交互に注視しながら高度を上げた。

「翔鶴」はまだ雷跡に気づかないのか、依然直進中である。早く知らせなければと心は焦るが、機は脚が出ているためスピードが出せない。私はとっさに「翔鶴」に分かるように、遠方の魚雷目がけて機銃を発射しようと、安全装置を外したとき、「翔鶴」もこれに気づいて変針をはじめた。「ああよかった、魚雷よ当たるな」「『翔鶴』頑張れ」後席からも叫んでいる。私達は神に祈り、固唾をのんで見

守った。魚雷二本は艦底を潜り、二本とも見事に回避した。が残る二本が艦底直下と、後部に命中して大きく水煙を吹き上げた。水煙はたちまち火焰に変わり、艦上では消火や応急措置のため、乗員が甲板上を駆け回っている。私は被害の広がらないことを念じ、海面を凝視した。するとまたもや二回目の魚雷発射を目撃した。「小しやくな、敵潜水艦め、今五〇〇キロ爆弾をたたきつけてやるぞ」と、発射点目がけて緩降下に入らんとしたとき、味方駆逐艦三隻が単縦陣で爆雷攻撃を開始したのである。やむなく緩降下を諦め、爆雷攻撃の効果に期待して雷跡を見ると、またまた二本が命中してしまつた。私は敵ながら見事な攻撃振りに驚嘆すると共に、上空から視認できない深度で、見命中させる敵の魚雷発射技術に言い知れぬ恐怖を感じたのであつた。

この魚雷攻撃を最初から目撃したのにもかかわらず、有効な防御措置や、敵潜を攻撃できなかった悔しさに、胸の詰まる思いで、ただ「翔鶴」の武運を祈つた。味方駆逐艦の爆雷攻撃で敵潜水艦は恐らく撃沈されたことだろうと思つた。

私は再びヤップ基地に機首を向け飛行を続けた。攻撃隊は大分進撃したことだろう。その時彗星一機がわが機に近づいてきた。みると「隼鷹」三小隊一番機吉元実秀兵曹と偵察岩井洗三大尉で、この機も脚不調のため、ヤップ基地へ向かうところであつた。「私はさつそく二番機の位置に編隊を組み飛行中、一式陸攻の二機編隊と遭遇した。陸攻は見慣れぬ彗星を敵機と勘違いしたのか、猛スピードで離れていった。

私たちの編隊は味方識別番号を送りヤップ基地に近づき無事着陸した。そして列線に機を止めて、指揮所へ行き、

岩井大尉が仔細を報告し、指示を待つことになった。

ヤップ基地には狭い宿舎があるのみで、搭乗員があふれていた。私達は、手荷物一つある訳でなく、全く着の身着のままの宿かりである。飛行機のところへ行き、基地整備員に脚の修理を依頼して指揮所付近で我々三人が待機し、岩井大尉からの指示を待つことにした。

私たちは、勇躍出撃していった「隼鷹」彗星隊のその後が気がかりで、攻撃が成功してくれる事のみを念じていた。すると夕刻に岩井大尉から「不確実な情報であるが」と前置きして、「彗星隊はどうやら全滅らしい、また九九隊も会敵できず、グアム島の飛行場へ着陸寸前、グラマンの襲撃を受け、大損害を被つたようだ。残念だなあ」と沈痛な面もちで話された。一同ただ呆然として、指揮所横の草むらに座り込み、今の話は嘘であってくれるようにと祈

触接機の電信員

高野 直（甲飛七期）

敵機動部隊サンゴ海に現わる

「敵機動部隊見ユ」

サンゴ海を索敵中の横浜海軍航空隊飛行艇六機のうち、わが機は中央索敵線を飛んでいた。

機長足立大尉の主電信員として、九六式空四号無線通信機の調整に余念のなかった私のレシーバーに、指定「キン」即ち作戦特別緊急信として傍受された。

電信員として勤務中に「キン」の電報を受信することは、そうざらにあるものではない。

あたかも静寂の中に裂帛の気合いをかけられた如くにピンと緊張しつつ、受信紙に鉛筆を走らせた。

続く

すでに数日前より、敵機動部隊の気配を察知して、扇形状

に張られたわが索敵線に引っかけたのである。

触接機として

敵機動部隊にむかう

かねてからの手筈通り索敵機全機は、ただちに基地ツラギに引返し、攻撃隊として雷装を急いだ。わが機だけは、

前年、前々年度の計四回にわたる南洋行動中も触接機として訓練されていたため、最優先で燃料のみ満載して、敵機動部隊にむけて急行した。

早くも陸攻隊の攻撃開始、巡洋艦一隻撃沈等の情報が入って大いに氣勢あがる。

洋上の雷装（魚雷二本）と燃料搭載に手間どり、大幅に出撃が遅延した模様のわが大艇攻撃隊が戦場到達までに、獲物がなくなってしまうのではな

いか。或いは夜間雷撃となつて、戦果をあげることが出来なくなるのではないかと、しきりに気がもめる。

途中の天候は雲量五〇、雲高五百〜千メートル、高度三千で雲上を飛び、一刻でも早く敵にとりつきたいと、はやる半面、増速して燃費がかさみ、敵上空に長く踏み止まることができなくなつてはと、悍馬の手綱を引き締めるがごとくに十ノット増速とする。

戦場が近づくにつれ緊張度も徐々に高まってくる。雲の形状までがふだんの哨戒の時とは違うかに見える。数刻後には攻防の修羅場と化すであろうこの雲の下、海底が俺たちの墓場か、或いは撃墜されながらも一矢を報いて敵空母に突入できる僥倖をとねがう。いずれにしても生還は期し難い出発前、寸秒をもおしんで慌しかった燃料搭載の作業中、

「こんなきつい燃料積もこれでおしまい。道連れも多いことだし、冥土へ行ってから、ゆっくり一パイやりましょう

や」と酒好きだった副電の加藤一飛曹（甲飛三期）がまるで遠足に行くかのように豪快に笑う。

事実飛行艇の燃料搭載は量も多く、そして、ほとんどの基地ではその設備もない。遠い集積場から栈橋までドラム缶を転がしてきて小舟に移し、更に小舟を洋上に係留してある飛行艇に横付けし、手押しポンプでの送油であるから容易ではなかった。搭乗員も整備員と一緒にの重労働である。

「あそこまで行っても相変わらず弁当運びと食卓番だから私は嫌だ」と一番若い副電中川二飛曹（十三志偵練）が異議を唱える。すかさず「心配するな、あそこには赤色、青色の兵隊さんが大勢いて、万事も面倒してくれることになっている。われわれはお客さんだ」と大村上飛曹（七志操練）が先任搭乗員らしい結論を出す。こんな冗談を叩き合っていたが、いずれも今は緊

張の面持ちである。

触接機としては何としても敵上空に踏み止まり、敵の情勢を逐一正確に報告し、わが攻撃隊を誘導せねばならない。

攻撃隊ならば全弾ブチこめば機体が軽くなるように気持ちも軽くなるのだがと、ちょっぴり僻も頭を掠める。

当然邀撃する敵戦闘機を断固排除して、触接機としての任務を達成するのだと、機長以下十名、闘志を漲らせる。

だが敵側としては、こんな邪魔者を絶対に放って置くはずもない。あたかも蜂の巣を突つついたように敵戦闘機は舞い上がってくるであろう鈍速にして、図体の大きいわが機、如何にして敵機を回避するのが問題である。

敵上空到達予定一時間前、今現在の雲高、雲量がこのままつづけば、もってこいの状況だがと、神に祈る気持ちとなる。

機長は操、偵、副電の主を集めて、

「敵空母が変針して風に立ち戦闘機をあげる気配を察した時は、付近の雲中に退避する。その時期は俺が指示する。副配置は所定の銃座について見張りを厳にし、特に待ち構えているであろう敵戦闘機には注意せよ」と最後の指令を発した。

敵空母発見

到達予定時刻四十分前、高度を徐々に下げて断雲を突つ切る。視界がかなりひらけて来た。

突如左側副操席の大村上飛曹が、左前方をはげしく二、三回突つつく様に指向しながら声高に叫んで機長席をふり向いた。

敵発見である。機長足立大尉は、普段では信じられないすばやい動作で右側機長席より左側副操席後方の窓へと走った。いや走ったというより

も飛んで行った。私もレシーバーをもぎ取るようにして機長のあとを追って肩越しに雲間の海面を見ると、いた!! 空母一隻を囲んで敵艦艇十数隻、整然たる隊形、これでも一度、陸攻隊が攻撃した敵艦隊かと疑がわれるほどの堂々たるものである。

このとき、機長はふり向いて私に「ブザーを押せ」という仕草を示した。そして耳元に口を寄せて、「落ちつけ、冷静にせよ」といわれた。さすがはわが尊敬する機長足立大尉。冷静そのものの、今脱兎のごとく走ったとは思えぬ態度であつた。

ペアを組んで二年余、操、偵、副電、搭整と何回か入れ替つたが、中尉で浜空着任以来、終始、機長、主電信員としてツーカーのつもりであつたが、やっぱり私は未熟だった。怨敵を一目だけでも見たいと瞬間的にせよ持場をはなれしかかも敵発見を後方席に知らせるブザーも押さずに窓際へ走つ

た弥次馬根性を指摘されたのである。

過去に無線の連絡もなく、消息を断った哨戒機、索敵機の幾多の例もあるが、今私のとった行動中、敵戦闘機に襲われたら、無電を打つ暇もなく撃墜され、その例にもれなかったであろう。

哨戒で未帰還機があつた時、せめて、「テ連送」(敵発見)、「ヒ連送」(敵飛行機発見)、それも飛行機なら大型か小型か(小型機ならば付近に敵機動部隊の存在を意味する)區別して打電してくれたら、作戦のたて様もあるのだかと、くやしがる首脳部の姿を見て、自分だけは、撃墜されながらも「ヒ連送」は打電しようとか常づね心に決めていたにもかかわらず、現実の敵発見にうろたえてしまったのである。

妨害電波発射さる

「敵機動部隊見ユ 地点〇

〇」

あらかじめ航空機暗号書で予想される電文を幾通りか用意して置いた中から地点のみを挿入して指定「キン」で全軍宛に発信した。即座にきれいな音色で「トットトン」

南海の空は青く澄んでいるが、電波の空間もまたきれいに澄んでいる。幸先よし、送受信機共に好調である。

第一電の発信文に基地了解の丸を大きく記して機長席に差出そうとしたが、そこには機長の姿はなかった。雲のために、敵の全容を把握できず前部の偵察員席へ走った様である。

やがてもう一隻の空母を発見、渡された発信文に平文で打てと指示してあつた。だが私は準備してあつた暗号文に兵力、配置、針路、速力、付近の天候を挿入してただちに発信した。

平文だと長たらしい電文になる愚を避け、字数の少ない暗号文を選んだのである。

機長としては第一電を発信してから少々の時間を要したので、早く第二電以下を発信させたい気持からだつたろう。これもきれいに了解信が返ってきた。

さて、第三電をと待機する私のレシーバーに雑音ともつかぬ異状な音が入りはじめた。そしてその音は、徐々に大きくなってくる。まったくききなれぬ電波である。そうか、これが敵の妨害電波かというやく気付く。

すでに上空にあるわが機を早くも認めた敵は、わが電波をキャッチして、妨害しはじめたのだ。あたかもトタン板を叩くがごとく、或いはスリ合せるかのごとくの音色と音量、困った。しかし困つたでは済まされぬ。折角敵上空に占位しながら敵状を報告できなくては何んにもならない。

飛行艇電信員となる

私は生来鈍感である。予科

練の通信の成績はいつも最下位であつた。誤字、脱字一字毎に一発宛のバッテリーを貰い、バッテリーの数では恐らく記録保持者であつたろう。したがって通信教員の顔は鬼のごとくに見え、将来電信員にだけは絶対になりたくないと思つていた。

それには通信に関係ない操縦になることだと独りきめていたがやはり愚鈍の性格では所詮無理、霞ヶ浦での二か月間にわたる九〇水練による操縦の適性検査も同僚は早くも単独飛行もできるほどの腕になつているのに相変らずもたつくばかりの私、操縦も不適合だった。

だが慣れとは恐いもの、不出来な予科練習生も、どうやら落ちこぼれにもならず、卒業の頃には通信技術もどうにか同僚たちに追いつくことができるようになった。飛練に入ってから自信を持ちはじめ、延長教育の頃は優越感すら持ちはじめた。最も嫌だつ

た通信が最も好きなものになったのである。

延長教育を終了して、最早や免許皆伝の虎の巻を伝授された証とばかりの左腕のトンビと錨のマークも誇らしげに、善行章一本の一等航空兵、押しも押されもせぬ一人前とうぬぼれていたが、転勤先の浜空へ行って驚いた。

三本、四本の古つわものがワンサといた。前任搭乗員はもちろん四本の古株、三本、四本が班長級、二本が中堅級で一本は総て若年者あつかいの飛行艇隊、まるで超ベテランの溜り場の感があった。「偏流測定は必要なし、指の先をちよつとなめて前に突き出せば風向、風速たちどころにわかる」

「俺が標的艦の煙突の中へ爆弾をほうりこんでやる」「電信機の故障は俺が一目にらむだけでひとりでになおってしまふ」

と豪語する古参の前では、われわれはまったく赤子あつか

い、卵の殻をお尻につけたヒヨコ同然だった。

冗談とはいえその技倆と自信があつてのことばである。

われわれはいつになつたらあの境地に到達できるのだから。

啞然とすると共にわが身を顧りみて心細くなるばかりだった。

それから二年半余、太平洋戦に突入する直前まで、内南洋の散在する島々を基地としての南洋行動中の訓練は主として触接機となり、その電信員として専門に鍛えられ、「もはや誰にもひけは取らぬ」の自信となつてきた。

かつて当初に古参たちがうそぶいた心境どうやら理解できるようなつたのである。バッテリーの洗礼から始まつた通信技術もすでに六年、今までの総ての訓練はこの時のためのものだ。敵さんの妨信ぐらいに絶対負けるものと闘志を燃やす。

続く

多田野語録

敬、怠に勝てば

吉なり

特別会員

多田野 弘

表題は、東洋古典にある言葉で、「敬しみの心が怠りの心に勝てば吉なり。逆に怠りの心が敬しみの心に勝てば、その結果は亡びに至る」の意である。と致知誌に解説されている。私には「敬しみの心」という言葉の意味をイメージできなかつたが、それは「謙虚である」ということを知った。

先日この会で「あなたはどうしてそんなに謙虚になられたのか」と、質問されたことを思い出した。その時には、とっさに正確な返答ができなかつた。自分が謙虚だなどとは思つたことがなく、私の生き方は少年期から、独立自尊

(他に頼らず、自分の道は自分が開く)という筋金入りの信条だったからだ。

謙虚とは一般に、控えめで、素直なことだといわれている。人間ができて来ると、自然にそういう謙虚な態度や振る舞いができるようになるという。それは、意図したものではなく、普段の生活態度から滲み出るものである。それを他から見て、謙虚だと言っているだけではないだろうか。

私が謙虚に見えたのは、青年期の3年間戦場で過ごしたとき、自分が魂の存在であることに目覚めたことが根底にある。それは、連日、米機の迎撃戦で私たち地上員にも死傷者が増えていったことに始まる。毎夜、「今日は無事だったが、明日は俺の番かも知れぬぞ」と言い聞かせて眠った。疲れて眠っていたある深夜、心の奥から「びくびくせずに潔く死ね」という声が聞こえてきた。同時に、「自分の死は、祖国と私の家族の平

安のために捧げる崇高な行為である」と、悟った瞬間、

「前から撃たれて死のう」

と、死を受け容れた。それは、自分が意識して決められることではなく、偉大な力（魂）が働いていると直観した。

それ以来、不思議にも、雨と降る弾雨の中を平気で動き回れるようになった。自分の命さえ投げ出させる魂の力を認めずにはいられなかった。戦後、先哲の書に、「魂は、肉体に宿り、心と身体を統御・支配する」とあり、魂の存在に確信を得た私は、生活を魂に仕える克己の生き方に一変した。それは、自分を自由にコントロールできる喜びで、快感に満ちていた。

まず、毎朝アラームなしの

5時起床から始めた。それが習慣になると、さらに厳しい

ハードルを自らに課して乗り越えていった。その喜びは大き

く、次第に自分の無限の可能性に向かって進められた。

それは、他からどう見られるかなどは問題ではなく、克己

の快感で過ごす日々の悦びであった。大いなる摂理の基に生かされている「今」に感謝して、魂に仕える克己の生き方が、他からは謙虚に見えたのではないかと思う。

とにもかくにも、そのような日々が百三歳の長寿と健康をつくってくれたのは間違いない。

続く

雄翔館見学者所感文

貴重な物を見せて頂き、ありがとうございました。たくさんの方々が亡くなられて戦争はもう二度としてはいけないものだと思います。

令和六年一月

志村様（中学生）

見学三回目になります。

いつも身が引き締まる思いで見学させて頂いております。

今まさに日本国民が戦争について我が事として考えなけ

ればいけない時期であり、今日の私達が存在するのは先人の人々の国や家族を思う心があったからであります。世界情勢が不安定な時だからこそ我々国民が自国の日本という国の未来について一人一人が真剣に考える時と思います。このままでは先人の方々が命をかけ戦い抜いた日本がなくなります。そういう大切な精神を呼び起こさせて頂く大切な資料館です。

令和六年一月

住所・氏名記載なし

私が初めて訪れたのは、小学生の頃だったと思います。父に連れられて来た記憶があります。幼い子供ながらに胸がとても熱くなった思い出があります。今では、私も三児の母になり、この度、家族で見学に来ました。平和なこの世の中が当たり前だと思いたくありません。

平和な生活が出来てい

事は当たり前ではない、とてもとても幸せな事なんだ」と、家族みんなで再確認することが出来ました。

子供たちがいつか大きくなり、親になり、新たな家族をもった時に、また見学に来て、平和への願いを次の世代に伝えて行って欲しいと思います。「明日が来ることは当たり前ではない」だからこそ、毎日を生懸命生きて、何事も頑張って、笑顔で過ごして行きたいと思っています。

令和六年一月

神奈川県横須賀市 小林様

当時の若者、彼等は今と同じく未来に希望と夢を抱いていたはず……

「家族や国家国民を自分らを守るのだ！」の気概から大

事な命を犠牲にされた心情を想像すると胸が締め付けられる。

この建物については、未永く維持して頂きたい。賛否はあるだろうが館内の掲示物の撮影を許してはどうか？

SNSを通じて、もっと広く知られることは必ずやプラスの効果があると思う。多少のマイナス面を考えても得る方が多いと思う。

令和六年一月

千葉県柏市 安藤様

上に飾られている人たちの使っていた物を間近で見ても、すごいなと思いました。

例えば、飾られているF6Fヘルキャット、P51DMスタングやP38Jライトニング、F4Uー1コルセア、色々な物を見て、嬉しかったです。もっと色々な物や遺書を見たいです。

令和六年一月

神奈川県横須賀市 小林様

過去にも予科練平和記念館に来る機会があり、その都度、先人達のおかげで今の平和が保たれているのだと感じました。本日は、先日公開された「あの花が咲く丘で君とまた出会えたら」を鑑賞してから

こちらに来ました。改めて来ると、とても心が痛みます。二度とこのような悲惨なことが起きないことを切に願っています。

また来る機会を設け、友人にも伝えていきたいと感じています。

令和六年一月

茨城県神栖市 田部様

ありがとうございます。

八十数年前に十代の若き人たちが間違った教育により、尊い命をなくしていった。この事実をあからさまに目にした時、「戦争ほど残酷なものはない」「戦争ほど悲惨なものはない」「しかし、今だ愚かな人により、その戦争が続いている地があると思うだけで、苦しく、辛く、悲しくなります。戦争という事実を大きな平和への道しるべとして、後世に残していく事！大切だと思います。

また、父母への感謝は、家族への愛…、これも教育の中

に含まれる事、「大切な教育」忘れないでほしい。

令和六年一月

東京都江東区 萩谷様

仕事の悩みがあり、本日こちらにお邪魔いたしました。

予科練平和記念館、雄翔館を拝見し、自分達は先人達の犠牲の上に成り立っているのだと、今日の幸せ感謝することとができました。素晴らしい展示を拝見させていただけたことに心より感謝申し上げます。

令和六年一月

千葉県香取市 鷹田様

私はちょうど今、授業で戦争を習い連れて来てもらいました。

私には兄がいるのですが、兄と同年齢の方々が戦争へ行き、国の為に敵軍の船に体当たりし自爆して死んでいく人々がいることを知り驚きました。

もし今でも戦争が続いてい

て兄や父が戦争に行き亡くなってしまうと考えると、とても悲しくなります。今でも世界のどこかで戦争をしている国があるのならば、今すぐやめるべきと考えます。命を無駄にせず、今を生きていくと誓えるような体験でした。

ありがとうございます。

令和六年一月

住所不詳 濱谷様

もう十年以上前、こちらに訪れた時、私は、この場から去る事がなかなか出来ませんでした。このような優秀な若者達がなぜ死ななければならなかったのか…。遺影も、今の様な画一なものではなく、額も大きさもバラバラで、いっそう悲しみがつのりました。なぜ、このように画的なものにしたのでしょうか。亡くなった方々の個性を感じられなくなってしまう事。残念です。

令和六年一月

住所不詳 西様

(公財)海原会寄付者御芳名簿

(敬称略) (単位千円)

三〇	須田 忠夫 (一般)	東京
五	加藤 伸子 (非会員)	栃木
一	広瀬 芳理 (一般)	栃木
五	松下 由佳 (一般)	神奈川
一〇	宮崎 修士 (一般)	茨城
一	片岡 寛 (一般)	茨城
五	鈴木 茂男 (甲16)	東京
二〇	鈴木 昭吾 (乙21)	静岡
一〇	北村 直也 (一般)	長野
五	若月 良介 (一般)	静岡
五	伊藤かをり (一般)	神奈川
五	塩澤 貞夫 (甲16)	東京
五	望月 昇 (甲14)	山梨
三	高山千恵子 (丙12遺)	北海道
五〇	武校OB会 (一般)	茨城
五	磯部 恭子 (一般)	静岡
五	シマヅユウタ (非会員)	
五	樋口 三郎 (甲13)	青森
一	西村 満 (甲10遺)	北海道
五	堀川 光子 (乙14遺)	大阪

海原会へのご芳志誠に有難うございました。



事務局日誌

七月

八日

機関誌編集委員会

於 ZOOM会議

機関誌九月号の編集会

議を行った。

十八日

三者連絡会

於 事務局

三団体共同事業について

参加者

予科練平和記念館長、

阿見町観光ガイド会長

他一名

平野事務局長

二十二日

武器学校総務部長表敬

於 武器学校

退任する総務部長を宮

本理事長と平野事務局

長が表敬した。

二十一日

資料収集支援

於 事務局・雄翔館

皇学館大学四年の二宮様が卒業論文作成のための、資料収集に来局した。

二十七日

燐蒸済資料の格納

於 海原会保管庫

行方参与が、予科練平和記念館で行っていた

燐蒸済の遺品などを所

蔵庫に格納

八月

六日

武器学校総務部長表敬

於 武器学校

新着任の総務部長を、

宮本理事長、篠田副理

事長、平野事務局長が

表敬した

七日

三者連絡会

於 事務局

参加者

予科練平和記念館長、

阿見町観光ガイド会長

他一名、平野事務局長

八日

錦鯉稚魚雄翔園池に放流

於 武器学校

錦鯉の稚魚百匹を雄翔園池に放流した。

十七日

八月定例理事会

於 事務局

出席者

宮本理事長、星指副理

事長、篠田副理事長、

平野理事、山下理事、

原監事、行方参与

二十七日

けやき台中学研修支援

於 雄翔館

平野事務局長が、守谷

市立けやき台中学校学

生の雄翔館見学を支援

した。

三十日

筑波大学ワークシopp

プ打ち合わせ

於 予科練平和記念館

筑波大学関連企業が実

施するワークシopp

九月

十二日

雄翔館床清掃立会

於 雄翔館

阿見シルバー人材セン

ターが行った清掃作業

に平野事務局長が立会

した。

十九日

武器学校OB会幹事会

於 武器学校

篠田副理事長、平野理

事が出席した。

赤とんぼ掲示板

昭和二十年四月十四日、

第721空(神雷部隊)第

六建武隊として鹿屋基地

から出撃、戦死された中根

久喜中尉(第十三期予備学

生)のご遺族が、左記二名

の予科練生のご遺族あるい

は関係者を捜しています。

① 布施 政治 少尉

(乙飛十七期)

東京都出身

昭和二十年四月十四日、

徳之島沖において敵艦船

突入戦死

遺族・布施スギ様(母)

(当時)

東京都目黒区在住

② 竹下 弘 少尉

(特乙一期生)

静岡県出身

昭和二十年四月十四日、

沖縄沖において敵艦船突

入戦死

遺族・竹下かね様(母)

(当時)

東京都池袋在住

宇佐海軍航空隊記念館の

織田様の御尽力により、こ

の度日米双方の資料照合に

よって戦闘状況が明らかに

なりました。つきまして

は、中根中尉のご遺族から、「中尉の列機搭乗員であつた2名の予科練生のご遺族または関係者に、中尉の遺品写真に写る両名の遺影を含めて情報を提供したい。」旨のお申し出が御座いました。

情報をお持ちの方は、海原会事務局までご連絡をお願いいたします。

(海原会事務局長)

【事務局連絡先】

〒300-0301

茨城県稲敷郡阿見町

青宿489-1 慎輝ビル 3階

公益財団法人 海原会 事務局

電話：029-886-5400

[E-Mail]

y-hirano@yokaren.jp

海原会会員の皆様へ

小さくてもあたたかい

一日葬 家族葬

お葬式のご依頼や
「もしものとき」に
備えた事前のご相談
年中無休で承ります

相談
見積 **無料**

お客様満足度
99%※

※当社施行客アンケート調べ

自宅葬、一日葬、お別れ会のほか、
ご希望に合わせた
お葬式プランがご用意です。

新型コロナウイルス感染拡大防止に万全を期しています。

お墓

お墓のことなら何でもご相談ください。
墓石工事は信頼の10年間の保証書付きです。

墓所工事

標準価格

(10万円以上)の

10%割引

サービス提供エリア:

関東・関西・東海



「お墓のお引越しガイド
&事例集」

無料で資料を差し上げます。

お葬式

葬儀一式をセット化した「葬儀式
セットプラン」を各種ご用意。最適
なプランをお選びいただけます。

葬儀

祭壇標準価格の

20%割引

※一部斎場、一部商品を除く。

新花で送る家族葬は

優待料金

サービス提供エリア:関東



「お葬式の流れが
わかる100項目」

無料で資料を差し上げます。

お仏壇

仏壇店は首都圏に2店舗(国分寺・千葉)。
伝統型仏壇や家具調仏壇、手
元供養商品まで豊富な品揃えです。

仏壇

店頭価格の

25%割引

※ただし、催事特価品と

仏具小物、手元供養商品

は対象外

サービス提供エリア:関東



「お仏壇カタログ」
「特選 お位牌」

無料で資料を差し上げます。

お問い合わせは
海原会事務局へ

029-886-5400

お問合せの際は、「予科練を見た」とお申し出ください。

MAO
MEMORIAL ART OHNOYA



メモリアルアートの大野屋

<http://www.ohnoya.co.jp>



「予科練」第485号11・12月号

令和6年11月1日発行 発行人 宮本忠明
(隔月奇数月1回1日発行) 編集人 塚 純一

発行所 〒300-0301 公益財団法人 海 原 会
茨城県稲敷郡阿見町青宿489番地1
(慎輝ビル3階)

郵便振替
00140-915433
0029188615433
0029188615433
0029188615433
定価500円